

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討

— 数法相配釈について —

中 條 暁 秀

(一) はじめに

『朝師御書見聞』所収の「本尊抄私記(五卷)・見聞(三卷)」について、『日蓮宗々学全書』の編者は、全八巻中第一から第五までを逸するがゆえに、身延山所蔵の「補施集 観心事 五帖内 日朝」と記すものを「私記」五巻として、第六・七・八の三巻は正本が散逸するによって、立正大学図書館蔵の小林日董師の写本を以て充てるところのものを「見聞」三巻として、別本と称する⁽²⁾、との言である。

そして、執筆の時期及び場所については、「私記」五巻は不明、「見聞」三巻はそれぞれの奥書によると、第六が「文明第八丙申正月二十三日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽³⁾、第七が「文明第八丙申二月九日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽⁴⁾、第八が「文明第八丙申三月十四日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽⁵⁾とある。とすると、『朝師御書見聞』の執筆時期を通観していえることは、まず日朝は宗祖自らが「此事日蓮当身大事」⁽⁶⁾と名づける『観心本尊抄』から、遺文の注釈という浄業を手懸けていったものと思われる。なお後年の執筆の主场所となる行学院はこの時分未だ竣成していなかったものと思われる。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(中條)

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(中條)

さて、「本尊抄私記・見聞」を検すると様々な問題が存するが、既に

(a) 日朝の伝と著述について⁽⁷⁾

(b) 朝師御書見聞について⁽⁸⁾

(c) 日朝は最古の科文といわれる五段の大科に則つて、『本尊抄』に注釈を施しているものと思われる。ということ⁽⁹⁾

(d) 「私記」(五卷)・「見聞」(三卷)に引用される経論疏釈は老大な量に上る。特に中古天台文献が極めて豊富である点が注目される。ということ⁽¹⁰⁾

等々の考察を試みたので、今は、「私記・見聞」八巻中に展開される「教法相配釈」を一つの手掛りとして、かかる問題について少しく検討を加えようとするものである。

(二) 「本尊抄私記・見聞」の検討

——教法相配釈について——

1、教法相配釈について

教法相配釈は、中国がその起源とされ、特に北魏曇首の撰になる『提謂波利経』(『提謂経』と略称されている)は、教法相釈を主張する疑偽経⁽¹¹⁾で、現在散逸して伝わらぬが、後の諸論書にしばしば引用されているなどの点から見て、かかる配釈の象徴的經典と目されている。例えば、智顛説・灌頂撰とされる『仁王護国般若経疏』卷第二は、『提謂経』の説を引いて、「提謂波利等問仏。何不為我說四六戒。仏答。五者天下之大教。在天為五星。在地為五嶽。

在人為五臟。在陰陽為五行。在王為五帝。在世為五德。在色為五色。在法為五戒⁽¹²⁾。」と述べ、また、『摩訶止観』卷第六上には、「若深識⁽¹³⁾世法⁽¹⁴⁾即是仏法。何以故。東⁽¹⁵⁾於十善⁽¹⁶⁾即是五戒。深知⁽¹⁷⁾五常五行⁽¹⁸⁾義亦似⁽¹⁹⁾五戒⁽²⁰⁾。．．．．．五行似⁽²¹⁾五戒⁽²²⁾。．．．．．五經似⁽²³⁾五經⁽²⁴⁾。」と説かれ、さらに湛然はかかる一文を『提謂経』からの援引であると、『止観輔行伝弘決』卷第六之二に、「深識⁽²⁵⁾世法⁽²⁶⁾即出世法。．．．．．世即出世。故引⁽²⁷⁾五行五常及十善法⁽²⁸⁾。即是五戒。．．．．．言⁽²⁹⁾五常似五戒⁽³⁰⁾者。如⁽³¹⁾提謂経中⁽³²⁾長者問⁽³³⁾仏⁽³⁴⁾。」と注している。

2、空海と教法相配釈

日本に來つての『提謂経』は、空海の『⁽³⁵⁾改定⁽³⁶⁾得度者受戒⁽³⁷⁾官符⁽³⁸⁾』中にその名が見え、『十住心論』第二の愚童持齋心の解説部分に、「夫五戒同⁽³⁹⁾於外書有⁽⁴⁰⁾五常之教⁽⁴¹⁾。．．．．．在⁽⁴²⁾天為⁽⁴³⁾五緯⁽⁴⁴⁾。在⁽⁴⁵⁾地為⁽⁴⁶⁾五嶽⁽⁴⁷⁾。．．．．．在⁽⁴⁸⁾人為⁽⁴⁹⁾五臟⁽⁵⁰⁾。在⁽⁵¹⁾物為⁽⁵²⁾五行⁽⁵³⁾。持⁽⁵⁴⁾之為⁽⁵⁵⁾五戒⁽⁵⁶⁾。」と、『提謂経』の教法相配釈を下敷とした一文が掲げられている。なお誤解を恐れずにいえば、真言教学は教法相配釈によって為しているといつても過言ではない。そして、この教法相配釈は真言の影響下、特に安然以降の台密諸家の教学中に混入して、いわゆる中古天台本覚思想の一翼を担うまでに成長するのである。⁽⁵⁷⁾

3、中古天台文献と教法相配釈

中古天台本覚思想を高揚する書物といわれ、恵心流の筆作の中でも初期の著作であると推定される『修禪寺決』には、中古天台でいう典型的な教法相の配釈が見られる。すなわち、『止観』の五略を五仏・五智に結びつけ「五略⁽⁵⁸⁾是

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

秘教所説、五仏、五智也。」と説き、さらに五智と五時とを「具三智、奧徳」。是名、五時。」⁽¹⁸⁾といひ、加えて「仏智、内徳具三眼、即五字。五時亦五重玄、故名、仏智、五重玄。亦五眼即五智也。」⁽²⁰⁾と、妙法五字と五重玄・五眼・五智とを結びつけての説示である。そして、これ以降、教法相配釈はその濃度を増し、例えば『法華肝要略注秀句集』・『文句略大綱私見聞』⁽²²⁾等においては、五大・五形・五智・五臟と妙法五字、皮肉骨の三と法報応の三身とが結びつけられて、極めて恣意的な程までに自由奔放な相配が、本覚思想の所産として無遠慮なまでに窺入していることを知るのである。⁽²³⁾

4、日蓮遺文と教法相配釈

教法相配釈のいわば典拠といふべき『提謂經』は、『戒体即身成仏義』・『隨意御書』・『戒法門』等にその列名が見られる。まず大石寺に真蹟の現存する『隨意御書』は、「提謂經と申經は人天の事をとけり」⁽²⁴⁾と。真撰と見て差し支えない『戒体即身成仏義』⁽²⁵⁾は、『提謂經』乃至『弘決』の文を恣意的に解決しようとする筆勢は全くなく、ただそっくりそのままを引用するという姿勢である。これに対し、定遺三巻統編所収の『戒法門』は、例えば五戒についていえば、「三千世界も五戒を以て作れるなり。……（中略）……五戒破れて世間の五穀損すれば、身の五臟もよはく成り、五神も栖を失ふ」⁽²⁷⁾等々自由奔放な展開を試みた上で、「上の五戒の名目は、提謂經に出たり」⁽²⁸⁾と、説示されるのである。

次に、教法相配釈の見られる遺文を列挙すると、前述の『戒体即身成仏義』、真蹟の現存する図録の『戒之事』⁽²⁹⁾、真偽未決との論のある『総在一念抄』⁽³⁰⁾・『阿仏房御書』⁽³¹⁾・『妙法尼御前御返事』⁽³²⁾・『三世諸仏總勘文教相麈立』⁽³³⁾、偽

撰の『戒法門』・『色心二法抄』⁽³⁵⁾・『一念三千法門』⁽³⁶⁾・『十如是事』⁽³⁷⁾・『此經難持十三箇秘訣』⁽³⁸⁾・『成仏法華肝口伝身造抄』⁽³⁹⁾・『無作三身口伝抄』⁽⁴⁰⁾・『十八円満抄』⁽⁴¹⁾・『御義口伝』⁽⁴²⁾等々である。

そして、これらの遺文を通観していえることは、(1)濃厚な教法相配積の見られる遺文は、偽書乃至真偽未決との論のあるものが大半である。(2)宗祖も一時期、かかる配積にかなりの興味を抱いていたことは間違いない。なぜなら、それは建長六年に系年される『戒之事』中に、五戒を五行・四季・五味・五色・方位・五龍・五雲・五仏・十干十二支・五星・五常に配当したものの真蹟の断片が、三島本覚寺に存するからである。(3)宗祖は純粹法華教学を樹立する上において、かかる問題は所詮第二義的なものであると考えられたためか、初期の遺文には見られるものの、最終的には除去されていったものと思われる。等であろう。

5、日朝と教法相配積

日朝の「本尊抄私記・見聞」全八巻中には「尋云五大即五行ト云者如何可相配耶」の項をはじめとする教法相配積が、九箇所に亘って注されている。今、これらを整理し、主たるものを掲げると、(1)五大と五行 (2)四菩薩と四大 (3)五大及び五臓と五智・五仏性・五果 (4)序品の五瑞と六大 (5)五大と五尊 (6)四菩薩と四大 等々の相配が確認される。いわゆる中古天台でいうところの典型的な教法相配積と、何ら撰ぶところはないように思われる。これと同種のものに「本地垂迹口伝」(『本尊論資料』所収)の〈相配事〉⁽⁴³⁾がある。なお筆者読書範圍の日朝関連著作には、前述の『法華肝要略注秀句集』・『文句略大綱私見聞』等に有名な、周知の五大・五輪・五智・五仏と妙法五字、皮肉骨と法報心の三身、等の相配は見られない。が、しかし、日朝がいうところの「我等衆生五尺形骸全体五輪塔婆形貌

也⁽⁴⁶⁾』との言を見ると、『阿仏房御書』⁽⁴⁷⁾・『御義口伝』⁽⁴⁸⁾等で説示される五大思想に根拠を置いて、宝塔と衆生との同等関係を説き、父母所生の肉身を以て宝塔と断ずるところのものを想起させるに充分で、かつその基調を同じうするものではないか、と案じられるものである。

(三) むすび

以上、極めて荒い論となってしまったが、縮めくりとして拙論の要点を述べるならば、

(1) 宗祖も一時期興味を持たれた数法相配積ではあるが、所詮は第二義的なものであるとして、最終的には斥けられた。

(2) 日朝の「本尊抄私記・見聞」中には、数法相配積が色濃く展開されている。加えて、「我等衆生五尺形骸、全体五輪塔婆形貌也」との言を見ると、『阿仏房御書』・『御義口伝』等とその基調を同じうするものではないか、と案じられる。

等が挙げられる。

爰に現在の自己の所信の一端を記したのであるが、識者のご叱正を乞う次第である。

〔注〕

- (1) 宗全一五卷「例言」(五〇六)及び宗全一六卷(三七八)の末注「編者云ク」を参照されたい。
- (2) 啓蒙等がいう「別本朝抄」の問題は後日に譲るものとする。
- (3) 宗全一六卷三二二
- (4) ♪ ♪ 三三八
- (5) ♪ ♪ 三七八
- (6) 定遺七二一
- (7) 拙稿「朝師御書見聞の一考察——安国論私抄について——」(一九〇二「樓神」五五)を参照されたい。
- (8) 注(7)の二一〇二を参照されたい。
- (9) 拙稿「朝師御書見聞の一考察——本尊抄私記・見聞について——」(三八二〜三八三『印度学仏教学研究』三三二)を参照されたい。
- (10) 注(9)を参照されたい。
- (11) 仏書解説大辞典七卷(五一三)を、また、牧田諦亮氏『疑經の研究』(一四八〜二二一)をも参照されたい。
- (12) 大正藏經三三—二六〇(下)
- (13) ♪ 四六—七七(中)
- (14) ♪ ♪ 一三四一(下)、また、三四二(上)にも「故提謂經云……」・「又与提謂対義……」との一文がある。
- (15) 弘全五—五五一
- (16) ♪ 一一—一八三
- (17) 田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』(四〇三〜四七四)、「鎌倉新仏教と日蓮思想」(二八〇〜二八八『日蓮聖人研究』所収)、日本思想大系9『天台本覚論』(四七七〜五四八)を参照されたい。なお拙稿はかかる論稿に負うところが大きい。
- (18) 伝全五—九二
- (19) ♪ 一二—二九

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(中條)

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

- (20) ♪ 一三六
- (21) ♪ 一二九三
- (22) 大日本仏教全書一八一―一六二、なお法華經方便品の三如是を報法応の三身に配当している箇所（四六）等もある。
- (23) 浅井要麟氏『日蓮聖人教学の研究』（三二五―三三五）を参照されたい。なお中古天台文献の成立年代の表が、前掲の『天台本覚論』（五四〇―五四一）にある。
- (24) 定遺一六一〇
- (25) 本書は偽書・疑書（真偽未決）説もあるようであるが、録内（三九）に編入され、かつ『祐師目録』（定遺二七三八）、日全の『法華問答正義抄』（一六卷一―左／＼写本立正大学図書館蔵）にもその名が見られるので、問題はないと思われる。
- (26) 定遺三
- (27) ♪ 一九四一―一九四二
- (28) ♪ 一九四二
- (29) ♪ 二二二二
- (30) ♪ 八五
- (31) ♪ 一四四五
- (32) ♪ 一五二七
- (33) ♪ 一六九七
- (34) 注（27）・（28）参照、なお本書は五戒・五山・五色・五味・五方・五体・五臟・五根・五智等々の教法相配釈に終始したものである。
- (35) 定遺一九四七
- (36) ♪ 二〇三四
- (37) ♪ 二〇三〇
- (38) ♪ 二〇六九
- (39) ♪ 二二〇四・二二〇七～八
- (40) ♪ 二二一二

- (41) 〳 二二四一
- (42) 〳 二六一五・二六二〇
- (43) 『日蓮聖人真蹟集成』第四卷(三四六)を参照されたい。
- (44) 宗全一六卷一三八・一四〇・一九一・二二七・二八〇・二八一・二八二・三二九・三三二
六四〳六六
- (45) 宗全一六卷二八一
- (46) 注(31) 参照
- (47) 注(42) 参照
- (48) 注(42) 参照

〈追記〉

- (1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』は定選、『日蓮宗々学全書』は宗全、『大正新脩大藏経』は大正藏経、『伝教大師全集』は伝全、『弘法大師全集』は弘全、とそれぞれ略称した。
- (2) 拙論は去る昭和五十八年十月二十八日(金)・二十九日(土)立正大学を会場として開かれた、第三十六回日蓮宗教学研究発表大会のとき、「朝師御書見聞」考——本尊抄私記・同見聞について——と題して発表したものの一部を整理したものである。